2042年、温暖化により南極の氷の下からアトランティス遺跡が見つかった。
理夢華はそこへステルスドローンを飛ばし、巨人・小人・竜など、この世のものとは思えない存在を目にした。そうした存在が古代に、存在したのかどうかを臥麟という不思議な老人に聞きに行った。臥麟の話を、友人の奈美と一緒に聞いた理夢華は、完全に納得できないまでも、それなりに満足した。

奈美
「とりあえず、わかりました。本日もご教授ありがとうございましたw」
理夢華
「それでは、私たちはこれで・・・」

すると臥麟が二人を呼び止める。

臥麟
「・・・時が満ちておるようじゃのう」
奈美
「時？」
臥麟
「いや、こちらのことじゃわい」
「それよりもお二方、さっき話した、侏儒という小人が『魏志倭人伝』に描かれていた話をしたじゃろ？」
奈美
「あ、はい」
臥麟
「そこには邪馬台国の女王・卑弥呼（ひみこ）という者が書かれておってな」
奈美
「それは日本史の授業でも出てくるので、流石に私でも知ってますが」
臥麟
「その卑弥呼の正体を聞きたくないかの？」
理夢華
「それは小人・巨人・竜と関係あるのですか？」
臥麟
「少しあるよーな、ないこともないよーな」
奈美
「私は日本史好きだから聞きたいわ」

奈美は教師を志望している。そのため、日本史も興味があるのだろう。

理夢華
「関係しているなら、聞いていきましょうか」
「ただ、そもそも、卑弥呼って存在したのかしら？」
奈美
「そうね、卑弥弓呼という男性の役職もあるから、卑弥呼も役職の一つなのかも」

Copyright(C)　2017 Mental&Body Balance Society. All rights reserved.

臥麟
「結論から言うと、卑弥呼は存在しておる」
奈美
「そうあってほしいわ～、古代のロマンよね～」
理夢華
「私は、どちらかと言えば真実が知りたいわ」
臥麟
「まず、この“卑弥呼”とは魏国側の表記であり、本来は“日巫女”もしくは“日御子”であり、太陽の巫女と言う意味じゃ」
「つまり」
奈美
「・・・つまりｗ」
臥麟
「“卑弥呼”は“日の巫女”であり、“アマテラス”なのじゃ」
奈美
「なるほど、天照大神も記紀神話では日の巫女とされているものね」
理夢華
「表記から推測はできるけど、他に証拠はあるのかしら？」
臥麟
「まあ、急がんと聞くのじゃ」
「卑弥呼の後を継いだのが“台与（トヨ）”という者じゃ」
奈美
「それも魏志に書いてあることよね」
臥麟
「そうじゃ。この“トヨ”が“トヨウケビメ”となるのじゃ」
奈美
「なるほど、それで伊勢神宮には、天照大神が祀られていて、その外宮には豊受大神が祀られているのね」
臥麟
「と、言う事じゃ」
「ちなみに、この邪馬台国（ヤマタイコク）の“台（タイ）”は、“台与（トヨ）”の“台（ト）”という表記から“邪馬台国（ヤマトコク）”と言うべきじゃ」
理夢華
「とすると、邪馬台国が大和政権につながるというのね」
臥麟
「そういうことじゃ」
理夢華
「つまり、卑弥呼は大和政権の大君の一人である、ということ？」
奈美
「そうすると、その可能性があるのは“神功皇后（じんぐうこうごう）”になるわね」
臥麟
「よう知っとるのぅ」
奈美
「神功皇后の年代はと・・・」

Copyright(C)　2017 Mental&Body Balance Society. All rights reserved.

奈美がスマートグラスを使ってネット上で検索をかける。

奈美
「神功皇后の夫の仲哀天皇の即位が 192 年、子供の応神天皇の即位が 270 年、卑弥呼が魏国に使者を送ったのが 238 年だから、年代的には合ってそうね」
理夢華
「けど、それだと神功皇后は何年摂政をして何年生きたことになるの？」
奈美
「“仲哀天皇崩御から応神天皇即位まで初めての摂政として約 70 年間君臨したとされる”とあるわ・・・。そして、年齢の推定は 100 歳・・・」
理夢華
「当時の平均寿命ってそんなに高くないんじゃないの？それで 100 歳はどうなのかしら」
奈美
「確かにそうね。『魏志倭人伝』には、倭国の人は 100 歳になるものがいると書かれているけど、どうなのかしら」

理夢華もスマートグラスをかけて調べ出した。

理夢華
「あの頃の中国には神仙思想があって東の海に蓬莱（ホウライ）という山があって、不老不死の仙人が住むとされているわ。だから、そうしたことが投影されて誇張表現になってるかもしれないわ」
奈美
「その可能性はあるわね」
理夢華
「だから考古学的に調べるべきよ。で、弥生人の人骨を調べると、どうも平均寿命は 30 歳前後らしいわ」
奈美
「思ったよりも短いはね。けど、織田信長の時代に“人間五十年”と言われてぐらいだし、それくらいなのかも」
臥麟
「ふむふむ、よー調べとるｗ」
「で、それらの情報からどう推測される？」
理夢華
「多分、この卑弥呼と台与の二人を合わせて“神功皇后”にしたのよ」
臥麟
「そういうことじゃｗ」
奈美
「けど、なぜその二人の合わせた呼び名にしたのかしら？」
臥麟
「つまり、こうじゃ」
「古代、倭国から大和や日本へと変容した時に、大陸から独立した国家であることを宣言した時があった」
奈美

Copyright(C)　2017 Mental&Body Balance Society. All rights reserved.

「遣隋使の有名なアレね。“日出処（ひいずるところ）の天子、書を日没処（ひぼっするところ）の天子に致す”」
臥麟
「うむ」
「そうした時に、過去に大陸の冊封に入っていたことをなかったことにするために、女王の名前を変更して一つにしたのではないか、と言う説じゃ」
奈美
「なるほど、大陸との臣下の関係をチャラにしたわけね」
臥麟
「そういうことじゃ」
理夢華
「あと、疑問なのは、なぜ邪馬台国は南にあるの？」
「『魏志倭人伝』の通りに読んでいくと、南の海に突き出てしまうわ」
奈美
「しかも、当時の日本地図も逆さまになっているし」
臥麟
「これは魏国の戦略が関係するのじゃよ」
「つまり、魏・呉・蜀の三国時代では、魏の敵国である呉の背後に同盟国があることにしたかったのじゃ」
奈美
「なるほど、そうすれば呉への牽制になるってことね」
臥麟
「そういうことじゃ」
理夢華
「とすると、変更されたのは方角だけなので、邪馬台国は畿内説になるのね」
臥麟
「まあ、九州地方には山門（ヤマト）という地名がある。だから邪馬台国は九州に元々あり、畿内に広がったのかもしれぬ。そして、女王・卑弥呼は、その九州も畿内も同時に治めていて、政治によって、または季節によって移動していたのかもしれぬのぅ」
奈美
「つまり、畿内・九州スイング説ねｗ」
臥麟
「ま、そんなとろかのぅｗ」
「さて、ここからが巨人・小人・竜とも関係してくる話じゃ」
奈美
「え？そうなの？」

二人は顔を見合わせた。
この『魏志倭人伝』の卑弥呼の話がどのように巨人・小人・竜につながるのか、ということを二人は思った。

Copyright(C)　2017 Mental&Body Balance Society. All rights reserved.